

創世記1：2-31「神の神秘に満ちた創造の一週間」

## 導入

先々週、創世記を簡単にご紹介しました。

その日は、「初めに、神が天と地を創造した。」という1章1節のみを学びました。

その学びを少し振り返りましょう。創世記は聖書の縮小版であり、始まりの書です。聖書全体で起こる出来事の多くの起源が、創世記にあります。

神は唯一のお方ですが、父なる神、子なる神、すなわちイエス、そして聖霊なる神の三位格が存在します。この三位格は対等であり、それぞれ違った役割を担っておられます。

神は時間の概念を造られました。時間の概念がなければ、日本の鉄道システムは大混乱でしょう。神が時間をお造りになったことを感謝しましょう。

神は無からすべてをお造りになりました。もともとあった材料から何かを造られたのではありません。神が何かを生み出すのに、既成の材料は要らないのです。

これは驚くべきことです。人間が何かを作る場合には、必ず材料が必要です。

宇宙は広大です。私たちの住む銀河を渡るには光のスピードで10万年進まなければなりません。その先には、1000億個の銀河が広がっています。

宇宙はあまりに広すぎて、私たちの頭ではどうも理解できないほどです。

今日は、創世記1：2-31から、神が私たちに知ってほしいと望まれることを見ていきたいと思いません。

ではまず、出エジプト記20：11を読みましょう。

それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

この箇所から、神が文字通り、一日24時間の6日間でこの世を創造されたことは明らかです。

出エジプト記の著者は、24時間の一日 x 6日間の労働と、7日目の24時間の休みについて記しています。その中で、神が24時間 x 6日間でこの世をお造りになり、7日目に休まれたことを引き合いに出します。

神が24時間 x 6日間で創造の業をなされたからこそ、このように引き合いに出せるわけです。

神が6日間で天地を創造なさったことの確証がここにあると私は思います。この件について、神のみことばを疑ったことは一度もありません。

さてここで、創世記は誰が書いたのかという疑問が湧くでしょう。

では、民数記33：2を読みましょう。

モーセは【主】の命により、彼らの旅程の出発地点を書きしるした。その旅程は、出発地点によると次のとおりである。

次に申命記31：24を読みましょう。

モーセは【主】の命により、彼らの旅程の出発地点を書きしるした。その旅程は、出発地点によると次のとおりである。

イエスは、創世記を含む書がモーセによって記されたことを認めています。

ヨハネ5：46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。

また、モーセはシナイ山の上で40日40夜神とともに過ごしました。

出エジプト34：28 モーセはそこに、四十日四十夜、【主】とともにいた。彼はパンも食わず、水も飲まなかった。そして、彼は石の板に契約のことば、十のことばを書きしるした。

200万人もの証人がいる中で山の上で神と40日40夜過ごした人の見解でなければ、創世記についてモーセが語るのと違う見解は聞くに値しません。

これらの情報を念頭に、神の神秘に満ちた創造の一週間を見ていきましょう。

一日ずつ分けて見ていき、それぞれについてお話したいと思います。

### 1. 第一日：神が光を造られた。(3-4節)

まず注目したいのは、神が「光」を造られたとき、その光は太陽の光ではなかったことです。太陽が造られたのはもっと後のことです。それは16節に登場します。ですから、闇は太陽光がないことではありません。では、神が「光よあれ」とおっしゃった光とはいったい何でしょう。

みことばの中からわかるのは、その光が良いものであり、闇と区別されていたことだけです。

私たちはみことばから、神が光であられることを知っています。

ヨハネ第一1：5 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。

この光が目に見える神のご栄光シェキナーであった可能性を指摘するユダヤ教の学者もいます。黙示録22：5を読むと、天国では神ご自身が光を照らしてくださるので太陽の光は要らないことがわかります。もしかすると、天地創造の一日目に神がおっしゃった光のヒントはここにあるかもしれませぬ。

ただし、私たちがはっきり知るべきことは、この光が良いものであり、一切汚されていなかったことです。

神は、闇から光を区別されました。神は光を昼、闇を夜と名付けられました。

そして、「夕があり、朝があった。第一日。」とあります。

夕方と朝で一日という考え方は私たちにはなじみが薄いかもかもしれませんが、創世記1章以外でも、夕方と朝で通常の日という考え方は38度登場します。ですから、神による創造の業がこれと異なる時間の尺度で行われたことを示す根拠はありません。

こういうわけで、ユダヤ教における一日の始まりは日暮れなのです。日暮れは、古い一日が終わり、新しい一日が始まる時です。新しい一日を享受するためには、まず休みが必要というわけです。

ヘブル語の聖書では、昼を意味する単語は通常、「ヨム」です。曜日の表記にも常にこの単語が「日」として使われます。

聖書において、何かを名付けることはその物事に対する主権を主張することです。神はここで昼と夜の役割を明らかにしました。

つまり、神は24時間の一日、または12時間の昼と12時間の夜を天地創造の基準となさいました。

これにはさまざまな理由がありますが、それらの理由は聖書の随所に、そして歴史の中で明らかにされています。神が24時間の一日をお造りになったことは、聖書を読めば明らかです。

## 2. 第二日：神は大空を造り、天と名付けられた。(6-8節)

聖書の学者たちは、英語欽定訳の翻訳をした際、「シャマイム」というヘブル語の単語を翻訳するのに苦労しました。英語欽定訳では、広がりという意味の単語が使われました。この個所の内容から、この単語の意味は、「私たちの上に見えるもの」です。こういうわけで、このふたつの創造の業を「海」と「空」と考える翻訳者がいます。

この特定の創造の業については、聖書に少なくとも17箇所表記があります。「主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。」(イザヤ40：22b)とイザヤは語りました。

(その他参照箇所—ヨブ記26：7、詩篇102：4、ゼカリヤ12：1)

この箇所を注意深く読むと、第二日の創造の業の後、神はそれを見て良しとおっしゃらなかったことがわかります。それは、まだ神が創造の業の真っ最中だったからだ多くの学者たちが指摘します。第二日から続く創造の業は第三日に完成しました。

## 3. 第三日：神が肥沃な地を造られ、水をひとつのところに集められた。(9-13節)

第三日には、おもにふたつの出来事が起こります。まず陸地と水を隔てること、次に、陸上の植物の創造です。

神は第三日中に二度、ご自身の業を良しとなさいました。もしかすると、これが第二日の分となるのかもしれませんが。

多くのクリスチャンは、第三日の創造の際、地球に大きなひとかたまりの大陸が造られたのか、それとも個々の大陸や島々が造られたのか、という疑問を持ちます。

この問いに答える唯一のヒントとなる聖書箇所は、ペテロ第二3：5-6です。

3:5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、3:6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。

ペテロ第二のみことばから、神が水からひとかたまりの陸地をお造りになったと推察できます。

神は、水を用いて陸地をお造りになったようです。創造科学論者ラッセル・ハンフリーズ博士によると、これは科学的に可能だといえます。

しかし、ここで大切なのは、使徒ペテロが創世記の天地創造の話を認めていることです。

聖書を解釈する上でもっともすぐれた注解書は、聖書そのものです。

聖書で理解に苦しむ箇所に出くわしたら、その疑問に答えを与えることが神のみこころであるならば、神は聖書のほかの箇所に光を当てて、確信を与えてくださったり、教えてくださるでしょう。

神の神秘に満ちた創造の一週間の第四日に進む前に、11-12節で3度登場するフレーズに注目したいと思います。この同じフレーズは、生き物の創造について記された21節にも登場します。

それは、「種類にしたがって」です。聖書が同じ単語や言い回しを繰り返す時は、それが重要だからです。では、なぜこの言い回しが大切なのでしょう。

このフレーズが重要な理由は、進化論と矛盾するからです。

神は、あらゆる種類の動植物をお造りになりました。これらの動植物が繁殖をする場合、同じ種類の動植物を生み出します。

別種の犬を交配したとしても、元となるそれぞれの種に似た特徴を持つ交配種ができます。

著名なドイツ人科学者ヨハン・ハインリッヒ・ブラシウス博士は語ります。

「十分な裏付けもなくこれほど広範囲に影響する結論を述べる科学書はまれである。ダーウィンは、ある種から別種が生まれると証明しようとした。これはずいぶん乱暴な仮説だと考える。というのも、証明されていない推測を用いた議論には、具体的な種の起源がひとつも名指しされていないからである。実験に基づく研究を重ねる動物学者は、実験もしくは天然のままの自然界に見られる現象のみを有効とみなす。そして、私たちが目にする現象は、動植物の子孫は常にその親に似ているというものである。つまり、同種に属するのである。

種の境界の不動性こそ、一般的には自然の法則である。」

このドイツ人科学者は、進化論を証明する根拠はないと言います。一方、私たちが今日目にする現象から、神があらゆる種類の動植物をお造りになったという証拠はあるというわけです。ですから、聖書が正しいという証拠は、自然界に見られるすべての現象にあります。

進化論の嘘を信じるには、自然界から目を背けなければなりません。

ローマ1：18-20

1:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。1:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

ローマ人への手紙のみことばによると、進化論者を始め、神による自然界の創造を否定する人々は、真理をはばんでいます。神はその人たちにもご自身の被造物をとおして語ろうとなさいますが、彼らはそれを受け入れません。

このまま悔い改めないなら、いつの日か、神の御怒りがこれらの人々に向かって天から示されるでしょう。(18節)

#### 4. 第四日：太陽、月、星 (14-19節)

第四日に、神は太陽、月、星をお造りになりました。神は第一日にすでに光をお造りになりました。しかし、それは太陽や月星の光ではありませんでした。

神は、光を放つものをお造りになります。神はここで、創造におけるご自身の道理を設けられません。太陽も月も星も、ご自身の目的のためにお造りになりました。

14節には、神がこれらの光をお造りになったのは、しるしのため、季節のため、日のため、年のためだとあります。

では、神がお造りになったこれらの光の目的を簡単に見ていきましょう。

- a) しるし—このしるしとは、道標を指します。羅針盤が発明される以前、旅人や航海士たちは星を頼りに航行しました。

イギリスはロンドンのジョン・ハリソンが航海用機械式時計を発明したのは、1764年のことです。これは、船で世界一周しても誤差約12キロメートルという精度でした。ジェームス・クックは、この時計を使って船で世界中を旅しました。

今でも星や月、太陽を頼りにはるか遠くまで旅ができる世界を神がお造りになったとは、なんと不思議なことでしょう。

b) 季節—季節は、創造の一週間から始まりました。（詩篇104：19）

なぜ四季があるのか、そして、神が太陽をお造りになったことが季節にどう影響しているかについては、簡単に説明することができます。

多くの人は、地球上の太陽に近い場所が暑い場所だと考えがちですが、それは違います。気候の違いは地球の傾きが原因です。地球は太陽の周りを一年で周回しますが、地球が傾いていることが原因で季節が生まれるのです。

地軸は公転面に対し23.5度傾いています。つまり、太陽の周りを公転する際、常に一定の方向を指しています。地軸の傾きにより、一年のうちの日照時間に差が生じ、これが季節を作り出します。地球の公転周期は365.24日です。太陽の周りを公転する際、地域によって日照時間が変わります。こうして、北半球と南半球に春夏秋冬の四季ができます。

この世界を作って、地軸を23.5度傾けられた神はなんとすばらしいお方でしょう。そのおかげで、私たちはもうすぐ桜の季節を楽しむことができます。四季がないと、周りの景色はずいぶん退屈なものではないでしょうか。

c) 日と年—地球の公転周期は365.24日だと先ほどお伝えしました。それはつまり一年を意味します。ですから私たちは日や年を太陽によって測るのです。

18節で神が良しとされたとあるのは当然です。これは本当にすばらしいことでした。

5. 第五日：神が水の中と空の生き物をお造りになった。（1：20-23）

第五日は、創世記を歴史の記述ではなく詩歌と捉える人々や、陸の動物から海の動物が生まれたと信じる進化論者に異論を呈します。

神は、海をお造りになった第三日ではなく第五日に海の生物をお造りになりました。もし創世記が詩歌であるならば、海が造られた二日後ではなく同じ日に海の生物も登場するでしょう。

進化論者は鳥が陸上動物から進化したと考えますが、鳥の肺の構造は陸上動物とはまったく異なります。ですから、陸上動物が鳥に進化するのとは不可能です。あまりに多くの変化が生じる必要があります、進化論に従ってそのプロセスが起こるのは不可能です。

鳥はこれからも鳥であり、陸上動物はこれからも陸上動物です。

神が創造された鳥の中でも進化論者を悩ます鳥がいます。

それは、くじゃくです。自然界に存在するものの中でも、くじゃくの羽は、ダーウィンに自身の進化論の有効性を疑わせたといえます。

ダーウィンは、「くじゃくの羽を見るたびに気分が悪くなる」とこぼしていたそうです。

進化論の父であるダーウィンは、なぜくじゃくの羽に悩まされたのでしょうか。

くじゃくの羽の圧倒的な美しさがそのおもな原因だったようです。

くじゃくの羽の美しさが知的存在によるインテリジェントデザインを示し、ダーウィンの進化論を打ち砕くのです。

くじゃくの成鳥には平均200本の羽がありますが、これらは毎年生え換わります。目玉模様の羽が170本と、30本の尾羽があります。

クジャクが羽を広げると、体の後ろに美しい扇ができます。

このような扇形を作るためには、羽が正確に並んでいなければなりません。

クジャクは、尾の筋肉を使って羽を一定の配置になるよう広げることも、注目すべき点です。また、羽を一定の配置に広げた際、羽を細かく振動させて音を立てることができます。

美しく広げられた羽の目玉模様は、なんと一定の間隔に配置されていて、すべての目玉模様が見えるようになっています。これは、目玉模様の羽の前にある短い羽と後ろにある長い羽に支えられているからです。

他にも、インテリジェントデザインを連想させる特徴が、クジャクの羽には30項目以上あります。その中で6項目は目玉模様の羽自体についてです。他の項目についてご紹介する時間はありませんが、ひとつだけ言うておくことにしましょう。神がクジャクをお造りになったのは、美しい羽で求愛させるためだけでなく、その美しさを示すためでもあります。

ダーウィンが美しいクジャクの羽を毛嫌いしたのも仕方ありません。

クジャクの羽を見るたびに、自身の進化論が揺るがされるのですから。

ダーウィンも、クジャクの羽が美しいことは認めざるを得ませんでした。美しいものの陰には必ず、インテリジェントデザインがあるのです。

## 6. 第六日：神が陸上動物と人間をお造りになった。(24-31節)

第六日は、天地創造の一週間の最後の一日です。この日、神は陸上動物を造られ、その後、人間を造られました。

人間が天地創造の最後に造られたことは、とても重要なポイントです。これにより、人間はすでに完成された場所に迎え入れられたのです。

もうひとつ重要なことは、すべての被造物がすでに成長した状態だったことです。宇宙ができてまだ6日間しか経っていないにもかかわらず、動植物はすでに成長した状態でした。

この部分では、26-27節のみに注目します。ここで、神は人をご自身に似せてお造りになりました。

これはどういう意味でしょう。

創造の最後の日に、神は「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。」とおっしゃいました。神はご自身の創造の業を特別な思い入れで仕上げられました。2：7には、神がちりから人を形作り、ご自身の息を吹き込んでいのちを与えられたとあります。

これは驚くべき内容です。人間は、神の被造物の中でも特別な存在です。肉体があるだけでなく、たましいと霊が備わっているのです。

神のかたちに造られたとは、簡単に言えば、神に似た者となるよう造られたということです。

アダムは、血と肉があるという点では神に似ていません。聖書は、神が「霊」だと語ります(ヨハネ4：4)。つまり、神に肉体はないのです。

しかし、アダムの肉体も神のいのちの投影でした。完全な健康体であり、死とは無関係だったからです。

神のかたちに造られたというのは、無形の部分についてです。このことにおいて、人間は動物界と一線を画しています。人間には、地球を統治する能力や、創造主と交わる能力があります。

神に似せて造られたとは、人間の精神的、道徳的、社会的側面を指します。

人は目的をもって造られました。人には選択の自由が与えられています。これは、神の知性や自由を表します。人間が何かを発明するとき、神が与えてくださった性質を露わにしているのです。

道徳面では、人は正しく完全無垢に造られました。これは、神の聖さを表します。1:31は、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」と語ります。

私たちの良心や道徳観は、元来造られた状態の片鱗です。罪悪感に苛まれたり、良い行動を褒めたりするとき、私たちが神のかたちに造られたことを認識させられます。

社会的には、人間は互いに交わるよう造られました。これは、神の三位一体のご性質を表します。

人類にとって、最初の友は神でした。神が女を造られたのはその後のことです。人がひとりであるのは良くない、と神が思われたからです(2:18)。

新しい友人を作ったり、あらゆる人と交流したりするとき、私たちは神のかたちに造られたことを証明しています。

神に似せて造られたことを、簡単にご紹介しました。では、今日のメッセージの適用について考えたいと思います。

### 適用

創世記1章は、この世が美しく造られただけでなく、神秘的な方法で造られたことを教えてくれます。

創造の道筋を学ぶと私たちは励まされます。創造の過程にかかった時間や創造の順序を見ると、人類のために宇宙が造られたことがわかるからです。

神は、このすばらしい自然界を私たちのために造ってくださいました。

また、創造に神の無限の力が現れていることから励ましを受けます。

創世記1章に記された天地創造の道筋を知ること、神を深く畏れ敬うようになるはずだと聖書は語ります。

### 詩篇33:8-9

33:8 全地よ。【主】を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。33:9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。

現代人が天地創造を信じたくない理由のひとつは、それを信じれば神が私たちの主であることを認めざるを得なくなるからです。

創世記1章を正確な歴史として受け入れる人だけが、天地創造における神の力の神秘を味わえるのです。

最後に、創世記1章には、父なる神の愛が示されています。

この箇所は、神が無限の知恵の持ち主であり、人類の父として無限の愛を注いでおられることを教えてくれます。

神は、私たちを愛しているから、この世を私たちのために造ってくださいました。

神は私たち人類を深く愛しておられます。人間が神に背いてこの世も人間も呪われる結果になったとき、その愛のゆえに、人間が神のもとへ戻れる道を作ってくださいました。

神は、私たち人間が神との正しい関係を取り戻すことができるよう道を備えてくださったのです。

また、罪によって汚されることのない新しいよりよい世界を待ち望めるようにしてくださいました。

そのような世界を待ち望み、神が真の友であるという正しい関係を築きたいと思うなら、今日しなければならぬことがあります。

それは、自分の罪を認めて神に謝り、神の御子であるイエス・キリストを信じることです。このお方は私たちの罪の罰を負って死んでくださいました。

進化論者によれば、私たち人間は特別な存在ではありません。しかし、あなたを造られた創造主なる神は、あなたのことが何よりも大切だとおっしゃいます。

神は、私たちのためにいのちをささげる目的でたった一人の御子を遣わされました。それは、私たちのために神が用意してくださった将来の祝福を私たちが得るためです。

あなたを造られた創造主なる神と一対一の関係を築くことを考えてみませんか。

祈りましょう。